

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00201

研究課題名（和文）関西中国書画碑帖コレクション形成の研究 未公開資料の分析を中心として

研究課題名（英文）A Research on the Collection of Calligraphies Paintings and Inscriptions Which Had Been Formed in Kansai: Placing the Focus on the Analysis of Unpublished Materials

研究代表者

下田 章平（SHIMODA, SHOHEI）

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：60825826

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は近代書画碑帖収蔵史研究の一環として位置づけられるものである。本研究では「収蔵集団」を想定し、未公開資料の分析を通じて、辛亥革命から第2次世界大戦終了時までの時期に、関西中国書画碑帖コレクションが形成された要因について解明することを目的とした。そして、犬養木堂の「収蔵集団」における役割、博文堂（美術商）の活動、中国人収蔵家の活動、複数の収蔵集団に所属した収蔵家の活動、内藤湖南と長尾雨山の収蔵指南活動について検討し、このコレクションが、主に明治44年以後の羅振玉コレクション、大正中葉から昭和初期にかけての著名中国人収蔵家コレクションの流入によって形成されたものと見通すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、質量ともに世界的に優れた関西中国書画碑帖コレクションに関して、「賞鑑家」「収蔵家」「業者」といった複数の収蔵関係者からなる「収蔵集団」（収蔵ネットワーク）によって組織的に収蔵が行われてきたことと想定し、個別の作品、日中収蔵関係者の日記、書簡等の未公開資料を分析により、収蔵家の交流及びそのネットワーク研究を進展させた点に、近代書画碑帖収蔵史研究上の学術的意義がある。また、収蔵関係者の収蔵観や書画碑帖に対する認識についても新たな知見を得ることができ、書道史、美術史、日中交流史などの周辺書学にも成果の波及が期待される。

研究成果の概要（英文）：This research is positioned as a part of the research on which how pictures and calligraphic works and inscriptions were collected in modern collection history whose periods should be from the time of breaking out of the Xinhai Revolution to the time before World War II. On the basis of collection groups, I hunted up main causes why and how this collection was formed during this period, full account of unpublished materials specifically given, concretely tracing the history of each, I analyzed the role of Inukai Bokudo among the collection groups, activities of Hakubundo as an art dealer, activities of Chinese collectors belonging to many groups, instructors playing the active part toward Naito Konan, and Nagao Uzan and so on. The conclusion of mine definitely drawn here is that this collection was formed by the two factors; One is by the Luo Zhenyu collection to the inflow of the collections and the other is that those collections were formed by the famous Chinese collectors.

研究分野：中国書法史

キーワード：書画碑帖 犬養木堂 博文堂 羅振玉 内藤湖南 長尾雨山 大西見山 林朗庵

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の現状

近代書画碑帖収蔵史の先行研究には、日本では富田(2002)、陶(2009)、関西中国書画コレクション研究会(2012)、中国では1993年10月に創刊した『収蔵家』誌(北京市文物事業管理局)をはじめ、荘(1997)、鄭(2008)などの研究成果が見られる。しかし、これらの先行研究では、収蔵家の事蹟やコレクションについては概括的、網羅的に論じられる傾向にあり、系統性を意識した研究があまり見られない。また、本研究に見るような交友及びそのネットワーク研究に関しては、松村(2011)、菅野・猿渡(2017)などがあり、その研究方法は本研究にも示唆を与えるものであるが、コレクションの売買、入手経路、鑑定内容などの濃密な収蔵活動については、あまり触れられていない。ゆえに、収蔵に特化した交友及びそのネットワーク分析を行う必要性を痛感し、本研究を進めようとするに至った。

(2) 本研究の着想に至った経緯

2010年以後、研究代表者の下田章平は、近代書画碑帖収蔵史について検討を重ねてきた(下田2023)。この検討の中で、一定規模の優れた中国書画碑帖コレクションを形成するには、一人の収蔵家の力では限界があるために、ある程度組織立った「収蔵集団」のようなグループが必要であると想定するようになった。そして、日本の書画碑帖収蔵界において「書苑を中心とする収蔵集団」、「犬養木堂を中心とする収蔵集団」という二つの有力な収蔵集団の存在を指摘し、大正12年(1923)の関東大震災を境として後者が中心となり、中国の書画碑帖の収集が行われるようになったという収蔵集団の変遷を示した(下田2019)。その後、「収蔵集団」の活動の実態解明のため、収蔵関係者の交友や収蔵ネットワークの分析を行う一方で、本研究の分析対象である、書簡や日記、あるいは書画に附随する箱書や題跋といった秘匿性の高い「未公開資料」を利用し、収蔵集団の特徴や変遷について検討を行い、一定の成果を得た。そこで、本研究では収蔵集団を想定し、未公開資料の調査と分析を通じて、関西中国書画碑帖コレクションの形成された要因を明らかにしたいと考えるようになった。

2. 研究の目的

(1) 目的

本研究は、収蔵集団を想定し、主に未公開資料の分析を通じて、辛亥革命から第2次世界大戦終了時までの時期に、関西中国書画碑帖コレクションが形成された要因について解明することを目的とする。

(2) 研究対象

関西中国書画碑帖コレクション形成に重要な役割を果たしたのが「犬養木堂を中心とする収蔵集団」である。当該収蔵集団は、賞鑑家に羅振玉(1866-1940)、長尾雨山(1864-1942)、内藤湖南(1866-1934)、収蔵家に菊池惺堂(1867-1935)、山本二峯(1870-1937)、阿部房次郎(1868-1937)、小川為次郎(1851-1926)、上野理一(1848-1919)、黒川幸七(2代目、1871-1938)、藤井善助(4代目、1873-1943)、業者に博文堂(主人は原田大観〔1855-1938〕)を据え、全体を統括していたのが犬養木堂(1855-1932)である(下田、2019)。本研究の目的を達成するために、上掲「犬養木堂を中心とする収蔵集団」を中心に、そのコレクション形成や交友関係、収蔵ネットワークを検討対象とする。

3. 研究の方法

(1) 「犬養木堂を中心とする収蔵集団」の分析

「犬養木堂を中心とする収蔵集団」で特に重要と考えられる5観点(「4. 研究成果」参照)によって分析を進めた。検討に当たっては、ある一群の資料ごとに翻刻しながら考察に取りかかるため、複数の観点を同時並行して検討するなど、進捗状況に合わせて弾力的に取り組んだ。

(2) 未公開資料の調査・分析

「犬養木堂を中心とする収蔵集団」に関連する人物の未公開資料を、所蔵者(所蔵機関)のもとで熟覧・撮影によって収集した上で、翻刻を作成、分析を進めた。その主たる対象は、関西大学内藤文庫所蔵の内藤湖南(家族宛を含む)関連資料と、2020年にその存在が明らかとなった博文堂関連資料(個人蔵及び行田市郷土博物館所蔵)である。

4. 研究成果

(1) 関西中国書画碑帖コレクションが形成された要因

特に大西見山の事例の分析によって、中国の書画碑帖は、当初、複層的に日本へ流入していたことが判明した。明治44年(1911)から大正初年にかけては、個人での売り込みや他業種からの参入が確認されるように、中国書画碑帖の市場は、これからの拡大が見込まれる新規開拓分野と見なされていたことが判明する。そして、本格的な市場形成のきっかけをつくったのは、京都避居に伴い、日本に大量の文物を持ち込んだ羅振玉であった。また、大正中葉を過ぎると、書画碑帖の優品を扱う業者は、博文堂や文求堂(寸紅堂)のような少数の業者によって寡占されていく状況が明らかとなった。したがって、主に明治44年(1911)以後の羅振玉コレクション、大正中葉から昭和初年にかけての著名中国人収蔵家のコレクションの流入によって形成されたものと見通すことができた。

(2) 犬養木堂の「収蔵集団」における役割

犬養木堂の書画碑帖の斡旋に関して、小規模なコレクションに対しては、犬養木堂が個別に斡旋する場合も見られたが、斡旋の難しい大規模で高額なコレクションに対しては、犬養木堂が主導して、「犬養木堂を中心とする収蔵集団」によって組織的に斡旋が行われていたことを明らかにした。また、犬養木堂は中国から流入する多くの書画碑帖を基本的には受け入れる立場をとっており、例えば、内藤湖南があまり評価しなかった顔真卿及び宋の三大家(蘇軾、黄庭堅、米芾)の書を評価しており、特に宋代墨跡の優品が日本に流入したのは、犬養木堂の書法観(収蔵観)も影響したものと考えられる。

(3) 博文堂(美術商)の活動

明治40年代(1907-1912)、博文堂は美術書の出版、また書画碑帖を扱う美術商として活動した。博文堂関連資料は膨大にあり、かつ資料の発見が研究の中盤にさしかかってからであったため、本研究では、久野錦浦(1875-1918)、大西見山(1870-1930)の事例の分析によって、博文堂(美術商)の初期の活動を中心に考察を進め、以下のような検討成果を得た。

書画碑帖の斡旋を委任

久野錦浦は、彼自身、あるいはその指示により竹部半野を通じて、広島県東部(旧備後国)の素封家に対して、また、大西見山も親族の橋本吉兵衛(1862-1924)や伊藤長次郎(5代目、

1873-1959) に対して、博文堂の初期羅振玉書画碑帖のコレクションを斡旋していた。このように、初期博文堂の活動は、地方の有力な素封家を取り込み、時に書画碑帖の斡旋を委任し、販路を拡大した状況が明らかとなった。

書画碑帖の販売促進戦略

博文堂は、自由民権運動を主導した政治家との人脈、法書会の人脈(後述)、篆刻家の桑名鐵城(1864-1938)らの形成した旦那衆の篆刻サークルなどの縁故を依りに書画碑帖の販売を拡大させた。また、活動開始当初から折に触れて目録を収蔵家に配付し、書画碑帖の販売後は、収蔵家からの依頼に応じて賞鑑家への問い合わせや、箱書、跋文を依頼して販売した書画碑帖の価値を定め、表具の仕立て直しの手配を引き受けるといった、アフターサービスの充実を図って書画碑帖の販売を促進させた。

「書苑を中心とする収蔵集団」との関わり

『書苑』(後継誌『書画苑』)は法書会という会員組織を母体として、明治44年(1911)に発刊された日本初の書の専門誌であり、この収蔵集団は中国書画碑帖に精通した『書苑』編集者の黒木欽堂(1866-1923)や滑川澹如(1868-1936)を中心に形成されたものである(下田、2019)。博文堂は「法書会大阪支部」として参加しており、関西方面の法書会の入会希望や雑誌の送付を取りまとめていた。また、『書苑』誌に広告を出し、博文堂の名を広め、美術出版に対する宣伝として当初より活用してきた。法書会の会員は収蔵家を兼ねる場合も多く、法書会の人脈は、博文堂の販路拡大に貢献したものと考えられる。

文求堂(寸紅堂)との競合

文求堂は文久元年(1861)に京都で開業し、明治34年(1901)、田中慶太郎(1880-1951)が東京本郷へ移転した中国書専門店である。実弟の田中常太郎(1885-1939)は明治42年(1909)、京都に寸紅堂を開業し、明治末年には書画碑帖を取り扱うようになった。その頃、文求堂(寸紅堂)は博文堂が活動する広島県東部にまで販路を広げて競合し、しかも博文堂と同じく初期羅振玉書画碑帖コレクションを取り扱っていた。このことは、羅振玉が清末に築いた日本人の人脈を頼りに(菅野、2016)、博文堂だけに肩入れをせず、したたかに中国書画碑帖の販路を開拓したことを物語っている。

(4) 中国人収蔵関係者の活動について

羅振玉、林熊祥(1896-1973)・林朗庵(名は熊光、1897-1971)兄弟を主な検討の対象とした。上述のように、羅振玉は日本における中国書画碑帖の市場形成の本格的なきっかけを作った人物であり、収蔵史上極めて重要な人物である。初期羅振玉書画碑帖コレクションの売却は、日本に明清書画と善本碑帖の実態を啓蒙する役割を果たし、上野有竹斎(1848-1919)、大西見山、久野錦浦コレクションの中核を形成し、山本二峯は触発されて明清書画コレクションを短期間で拡充させる契機になったと見られる。また、林熊祥、林朗庵兄弟は台湾五代家族の一つ林本源家(板橋林氏)の出身であり、実業家としてだけでなく、書画碑帖の収蔵でも名高い。特に林朗庵は10代より収蔵活動を開始し、20代前半には日本の収蔵界に名が知られるなど、早熟の収蔵家であった。林兄弟の福建人脈と清の遺臣の人脈によって書画碑帖の知見を深化させたものと見られ、特に日本への中国書画碑帖の流入に関しては、清の遺臣の人脈が重要な役割を果たしていたものと推定される。

（５）複数の収蔵集団に所属した収蔵家の活動

「犬養木堂を中心とする収蔵集団」と「書苑を中心とする収蔵集団」に両属した収蔵家である大西見山と林朗庵の活動について考察した。大西見山は『書苑』主幹の黒木欽堂と同じ香川県の出身であり、『書苑』にもそのコレクションを提供し、『翁覃谿校勘秘本淳化閣帖』（法書会出版部、1915）も刊行していた。一方、大西見山は博文堂が仲介した自身のコレクションに対しては、黒木欽堂から影印に対する申し出があっても謝絶することを博文堂に示している。このように、大西見山は羅振玉と密接な交友関係を持つ博文堂との関係性を重視していたために、黒木欽堂との関係には一定の距離を保っていたことが判明した。一方、林朗庵は、日本や中国の収蔵に関わる広汎な交友関係を形成して収蔵活動を行っていたが、大西見山のようにある業者や収蔵家に加担することはなかったようである。ゆえに、収蔵家によって「収蔵集団」との距離や態度が異なっていたと見られる。

（６）内藤湖南、長尾雨山の収蔵指南活動

「犬養木堂を中心とする収蔵集団」の賞鑑家の中心として活動したのは、羅振玉、内藤湖南、長尾雨山であり、内藤湖南と長尾雨山の収蔵指南活動を中心に検討した。内藤湖南は、山本二峯の文物の鑑定も行っていた。しかし、山本二峯は網羅的、系統的な書画の収集を行い、宋元画の価値判断が分かれる時期にあって、新渡の宋元画を積極的に収蔵して「宝宋堂」と号したように、自らの審美眼によって、新渡の宋元画の再評価を試みており、あくまでも内藤湖南の意見を参考程度にとどめて収蔵活動を進めていたようである。長尾雨山は、大正3年（1914）12月に中国から帰国し、日本で本格的に収蔵指南活動を行うことになった。同じ香川県出身の大西見山は、長尾雨山の影響で蘇軾に関する文物の収蔵活動を推進したことは特筆される。また、大正6年（1917）11月頃に、犬養木堂が伊東巳代治（1857-1934）に羅振玉書画碑帖コレクションを斡旋しているが、羅振玉が「犬養木堂を中心とする収蔵集団」の賞鑑家であったにも関わらず、二度も犬養木堂が長尾雨山に鑑定させている。この事例によって、犬養木堂が羅振玉に匹敵する賞鑑家として、本場中国に逗留して書画碑帖の鑑識眼を磨いた長尾雨山の才能を高く評価していたことが判明した。

引用文献

- 荘申『従白紙到白銀 清末広東書画創作与収蔵史』（東大図書股份有限公司、1997）
- 富田昇『流転 清朝秘宝』（日本放送出版協会、2002）
- 鄭重『収蔵十三家』（百花文芸出版社、2008）
- 陶徳民『内藤湖南と清人書画』（関西大学出版部、2009）
- 松村茂樹「書画文墨趣味のネットワーク」（『アジア遊学』146、2011、41-50頁）
- 関西中国書画コレクション研究会編『国際シンポジウム報告書 関西中国書画コレクションの過去と未来』（同会、2012）
- 菅野智明「羅振玉と明治末葉の東京」（『中国文化』第74号、2016、80-92頁）
- 菅野智明・猿渡康文「扶桑再遊記」にみる羅振玉と日本人 社会的ネットワーク分析の視点から」（『書学書道史研究』第27号、2017、1-16頁）
- 下田章平「中国書画碑帖の日本流入に関する一考察 収蔵家・菊池惺堂を起点として」（『日本中国学会報』第71集、2019、187-200頁）
- 下田章平『清末民初書画碑帖収蔵研究』（知泉書館、2023）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 下田章平	4. 巻 第51号
2. 論文標題 大西見山の収蔵に関わる交友関係について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 相模国文	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 下田章平	4. 巻 第16号
2. 論文標題 大西見山の収蔵活動と日本への碑帖流入の実態	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 41 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 下田章平	4. 巻 第32号
2. 論文標題 初期羅振玉書画碑帖コレクションの日本への流入	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 57 - 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11166/shogakushodoshi.2022.57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 下田章平	4. 巻 第50号
2. 論文標題 久野錦浦の収蔵活動と博文堂（美術商）初期の活動実態	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 相模国文	6. 最初と最後の頁 21-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 第43号
2. 論文標題 第五回内国勸業博覧会における端方コレクション公開の意義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 湖南	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 第79号
2. 論文標題 山本二峯の収蔵に関する一考察 関西大学図書館内藤文庫所蔵湖南宛二峯書簡を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国文化	6. 最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 第49号
2. 論文標題 林朗庵の収蔵に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 相模国文	6. 最初と最後の頁 26-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 78
2. 論文標題 犬養木堂の中国書画碑帖の斡旋とその目的 中国人収蔵家を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国文化	6. 最初と最後の頁 67~79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 第13号
2. 論文標題 犬養木堂の中国書画碑帖鑑定について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 39～50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 大西見山の交友関係に関する一考察
3. 学会等名 全国大学書道学会第65回令和5年度(東京)大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 近代書画碑帖収蔵史
3. 学会等名 2022中国近代美術留学史料与研究検討会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 久野錦浦の収蔵活動について
3. 学会等名 第32回書学書道史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 第五回内国勸業博覧会における端方コレクション公開の意義
3. 学会等名 書文化研究会第1回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 羅振玉と中国書画碑帖の日本への流入
3. 学会等名 全国大学書道学会令和3年度(香川)大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 犬養木堂の中国書画碑帖の斡旋とその目的 中国人収蔵家を中心として
3. 学会等名 書論研究会関東部会6月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 山本二峯の収蔵に関する一考察 関西大学図書館内藤文庫所蔵湖南宛二峯書簡を中心として
3. 学会等名 書芸術研究会第2回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 犬養木堂の中国書画碑帖鑑定について
3. 学会等名 令和元年度全国大学書道学会鳥取大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 犬養木堂の中国書画碑帖の斡旋 中国人収蔵家を中心として
3. 学会等名 書論研究会関東部会 6月例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 下田章平（中国芸術研究院美術研究所編、下田ほか33名による共著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 広西師範大学出版社	5. 総ページ数 629
3. 書名 中国近現代美術留学史料と研究検討会論文集（うち「近代書画、碑帖収蔵史研究」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------